

ニューノーマル時代における医療人・コミュニケーション教育

星薬科大学 薬剤師職能開発研究部門

湯本哲郎

はじめに

新型コロナウイルス感染症（COVID-19）に対して、我が国のワクチン接種体制も随時構築が進められているが、未だ予断を許さない状況である。このような状況下、日々医療の最前線で患者の治療に尽力されている医療従事者に心から敬意を表するとともに、深く感謝を申し上げます。また、残念ながら感染によりお亡くなりになられた方々に謹んでお悔やみを申し上げますとともに、罹患された全ての皆様に対し1日も早いご回復をお祈り申し上げます。

さて、本感染症は、教育現場においても大きな影響を及ぼした。自身の1年間を振り返ると、一教員としては、オンデマンド授業への対応（妻と2匹の愛犬が寝静まる深夜に収録）、300名規模のオンラインSGDシステムの構築と運用（早期臨床体験学習、PBL演習等）、実務実習事前学習における対面でのコミュニケーション演習、また、指導グループ（各学年数名の学生を担当）・研究室、実務実習中の学生に対する多面的な支援を行なった。薬剤師としては、職能団体の要請にもとづき、ダイヤモンドプリンセス号の乗船客への支援をさせていただいた。3.11の際は、宮城県女川市の医療機関を中心に支援をさせていただいたが、現場での活動を通じて薬剤師法の第一条（薬剤師は、調剤、医薬品の供給その他薬事衛生をつかさどることによつて、公衆衛生の向上及び増進に寄与し、もつて国民の健康な生活を確保するものとする。）の重要性を改めて実感する機会となった。

著者は、病院薬剤師の現場経験を基盤として、主にコミュニケーション領域の講義と演習を担当しているが、今回は表記タイトルにもとづき、コロナ禍における自身の教育・研究活動から得られた知見、想いを記載する。特に大学教員以外の方々が大学教育の一例を知る機会になれば幸いである。なお、人工知能（AI）を活用した自己学習用のコミュニケーション教材の研究開発に携わっているが、機密情報等を踏まえ、本稿では割愛する。

オンライン授業・演習を経験して

はじめに、オンデマンド型講義を実施した経験にもとづき、そのメリット・デメリットについて考察した。

メリットとしては、学生が講義（一部演習）を自己調整しながら学習できる点が挙げられる。具体的には、一時停止機能を活用した「先送りしない疑問点への解決」、また、繰り返しの再生（一部・全体）機能を活用した「反復学習による知識の定着」であり、主体的に学習できる学生においては特に有用と考えられた。なお、著者担当の授業、演習（個人単位）では、授業中にワークシートの提出を求めていたが、学生の時間的な余裕を含めて従来よりも質の向上を実感できた。また、双方向授業の視点においてメリットとは言えないが、オフィスアワーにおける質問件数も増加し、講義内容に対する学生視点での理解度、疑問点を把握できた。以上から、本来の学

習方略である「一定の情報を多人数に効率良く提供する」という視点では、知識の想起、解釈レベル、さらに、個人で自立して習得すべき一部の課題解決レベルで有用と考える。なお、個人的な反省点としては、学生に興味を持ってもらえることを期待して自分本意なスライドを作成した結果、特にハンドアウトを自宅で白黒印刷した学生達から多くのフィードバックがあり、教材作成の在り方において初心に戻る機会を得た。

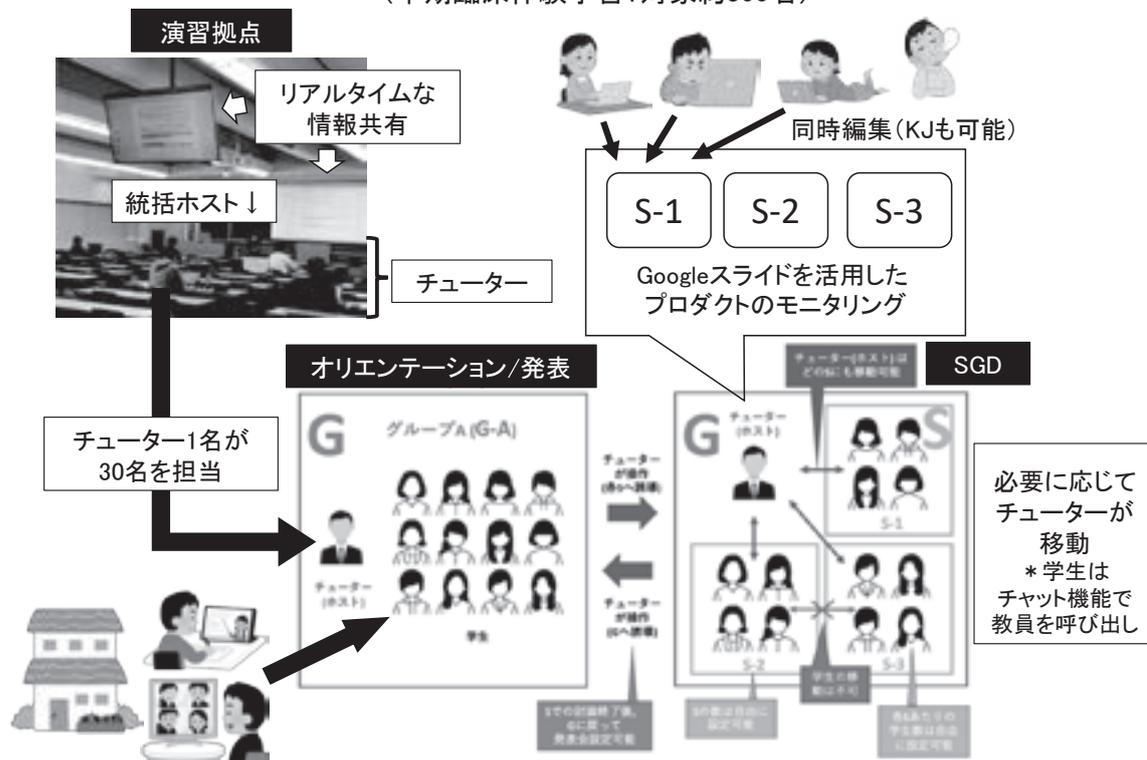
デメリットとしては、アンプロフェッショナルな学生への対策、また、教員が学生の知識習得に対する確認（不安）から実施した各種小テストやレポート等によって、従来以上に学生へ大きな負担を与えたことが挙げられる。また、ハンドアウトを印刷・記入したい学生にとっては、印刷関連コストも負担だったと認識している。さらに、入学時点からコミュニティが形成されていない低学年（特に1年生）にとっては、孤立感の助長に繋がり、学生への種々の支援を通じてその在り方を改めて考える機会となった。

次に「オンラインを活用したSGD（Small Group Discussion）」について記載する。本学では、WebClassとZoomを教育リソースとして導入しており、WebClassで学生への事務連絡、関連資料の配布（事前・随時）、課題・アンケートの実施、レポートの回収等を行い、SGDは、Zoom（ブレイクアウトルーム）とGoogleスライドを活用した。また、学生は、自宅から参加し、チューターとなる教員は、トラブル対応、情報共有の観点から教室に拠点を設定して対応した（図）。

学習方略としてのSGD本来のメリットは周知であるため割愛するが、コロナ禍において、学生間、学生教員間、そして教員間のコミュニケーションの場となったことが一番大きなメリットとして実感した。特に学生自身の生き生きとした姿や教員との議論を積極的に求めてくるパフォーマンスは、実感を裏付けるものであった。従来、通常の授業でSGDを実施していたケースでは、

ブレイクアウトルームを活用したSGDのイメージ

（早期臨床体験学習：対象約300名）



学生は椅子のみ方向を変え、教室内で約150名の学生が一斉に議論する煩雑な状況であった（前・後半クラスで計2回実施）。しかし、オンラインでの運用システムを構築したことで、一度に約300名の学生を対象としても効率的な運用が可能となり、学生からも一定の評価を得ることができた。教員として「コロナ禍」を言い訳にせず、SGDを通じた学生の態度面の醸成や多様な価値観と触れる機会を少しでも設定できた点は正直安心している。

また、著者はアドバンストコースでチーム医療演習を担当しているが、「多様な繋がり」という視点においても有用であると実感した。本プログラムは、医師、歯科医師、薬剤師、看護師、臨床心理士、臨床検査技師、ケアマネジャー、MSW等を養成する複数の大学と協働して毎年実施しており、本年度はオンラインで実施した（患者会による講演、症例ベースのSGD等）。このような大学間連携は、日程調整や物理的環境の確保等で実施に制限が発生しやすいが、オンラインでの運用方法を導入したことで、教員の実施拡充意欲が高まり、現在、前向きな議論を進めている。さらに、本環境は、医療機関や海外とのインタラクティブな連携体制への発展も可能であり、本学の実務家組織が主体となって環境整備を進めている。なお、教育上のデメリットとしては、特に大きな問題を現状で認識していないが、学生の参加環境（使用端末、ネット環境等）、実施に当たってのスタッフの準備負担（講座制の研究室における教授職として反省）に関しては、今後検討が必要と考える。

また、「多様な繋がり」という視点として、詳細な記載は差し控えるが、コロナ禍において大学教育をどのように実践すべきかを議論・共有するためのSNSグループに参加している。単科大学に所属する著者にとって、大学・学部を越えた多様な教員との意見交換は、多くの価値ある気付きが得られ、意思決定において大変参考となった。このようなコミュニティを今後も継続して大切にしていきたいと強く実感した。

最後に実務実習事前学習におけるコミュニケーション演習の反省点について記載する。基本的な説明や実施方法は、オンデマンド型の講義を実施し、感染対策を含めた実習日数の制限を考慮して、本年度はロールプレイ用のデモ動画も作成した。実際に学生とロールプレイを実施する中で、デモ動画とほぼ同じ対応をする学生が予想以上に多いことに驚愕した。学生自身が考え実践し、失敗から学び、成長することを推奨してきた著者にとって、一番避けたい「事前に答えのあるものを一生懸命予習し、本番で100点を目指す」学習環境となってしまった。実務実習では多様な患者とインタラクティブにコミュニケーションを図りながら薬学的管理、生活支援を実践していくため、現場の先生のご指導を通じて学生へ価値ある気付き、リカバリーの機会を多くいただければ幸いである。なお、著者と関係のある実習施設では、薬局カウンター、病室に端末を持参し、別室の学生に患者対応の機会をいただいている施設もあり、患者との信頼関係に加えて、後進育成の姿勢に頭の下がる思いである。本稿を通じて改めてお礼申し上げます。

おわりに（ニューノーマル時代における医療人・コミュニケーション教育について）

コロナ禍の大学教育について、一教員の私見を雑多に記載した。最後に著者の想いを何点か記載する。

第一に、本年度は種々理想を頭の中で描きながら、実際は締め切りに追われる中で何とかオンデマンド型の講義、オンラインSGDを実施できたと言うのが率直な感想である。今後、対面での講義が推進されていくと思うが、オンラインSGDのように、本来の講義と比較して学習方略に優れるものは、スクーリングとのハイブリッド型講義として実施できる環境が望まれる。

第二に、薬剤師の職能への社会的ニーズとして、0414通知、また、調剤後薬剤管理指導加算（継続フォローアップ）を背景に、直接の対面を伴わない患者とのコミュニケーションが従来以上に求められる。つまり、授業においても対面教育一辺倒ではなく、新たなコミュニケーションの在り方として薬学教育のカリキュラムに実装することが重要と考える。

第三に、冒頭で記載したが、ダイヤモンドプリンセス号の乗船客支援を通じて、諸外国の方々とのコミュニケーションや処方提案の在り方、さらに、「支援したい気持ち」と「未知なる感染症への不安」の中での倫理的葛藤等の経験を教育に反映することができた。医学部と同レベルの環境は厳しいとしても、臨床系教員である以上、当然、学生にとって最も身近な医療従事者、そして、社会人、医療に携わる者、薬剤師としてのロールモデルであるべきであり、業務過多を理由として医療現場から距離をおいていた自身への戒めにしたい。

最後に、入学時からの「学生としてのプロフェッショナリズム」教育の重要性について記載する。執筆当初、デメリットの一部として関連内容の記載を検討したが、生活リズムの自己管理、毎日の健康チェック（検温等の大学システムへの入力を含む）、医療人としての節度ある社会行動、タイムマネジメント（出席、課題等）、ハウレンソウ、社会人としてのマナー、予習から復習までの学習習慣、個人情報保護や情報リテラシー、そして、与えられた環境で自身のスキルを磨く精神（ないものねだりをしない）等は、学生が常に自らを律し対応すべきまさに「学生としてのプロフェッショナリズム」である。つまり、コロナ禍を理由として教員、大学が過度に学生へ様々な配慮をし過ぎると将来的に学生自身が苦勞し、何より患者に迷惑をかけることとなる。学生にとって記述した内容の遵守が単位取得、ペナルティー回避という低次元なものでなく、学生自身のプロフェッショナリズムとして定着するように根気よく指導していきたいと考える。